



<エッセー> 『オズの部屋探し』 パリ公演顛末記

著者	東浦 弘樹
雑誌名	年報・フランス研究 = Bulletin Annuel d'Etudes Francaises
号	54
ページ	45-51
発行年	2020-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029236

[エッセー]

『オズの部屋探し』 パリ公演顛末記

東 浦 弘 樹

私、東浦弘樹はフランス文学の研究者・教育者であり本学文学部の教授であるが、同時に劇作家・役者でもあり、チーム銀河という演劇ユニットを主宰している。チーム銀河は2014年に旗揚げしたもので、ユニットを名乗ってはいないが、現実にはメンバーは私しかいない。私が戯曲を書き、スタッフ・キャストを集めて上演する、私自身も役者として出演するというのがチーム銀河のコンセプトである。

年甲斐もなく演劇ユニットを立ち上げたのには理由がある。私は学生時代(1977～1981)、京大西部講堂にあった風波ふうはという学生劇団に所属し、役者として活動していた。当時は関西の小劇場・学生劇団が非常に元気な頃で、京都大学のそとばこまちや大阪芸術大学の劇団☆新感線がメジャーになりつつある時代だった。しかし、風波のメンバーは誰一人プロになることもなく、それぞれの道に進み、私自身も演劇活動から離れていった。

自分が芝居を再開することなどありえないと思っていたが、あるとき私はタバコをやめて急激に太ってしまった。メタボ対策として何かしなければならなかったとき、あることが私の脳裏をよぎった。遡ること数年、私のゼミの女子学生が兵庫県立ピッコロ演劇学校に通っていると言って、私に卒業公演のチケットを差し出してきた。もちろん私は見に行った。そのときは自分自身が演劇学校に通うなどということは考えていなかったが、私の家からそう遠くないところ、自転車で20分程度のところにそういうものがあるということは頭にインプットされた。

メタボ対策のためにあそこに行こう——そう思った瞬間、大げさに言うと私の中の芝居心に火がついた。当時の私は53歳、同期の学校生は20代、30代

の若者が多く、なかには高校を出たての人間もいたが、できればこのままずっと在籍していたと思うほど楽しかった。しかし、学校というのは永遠にいられるところではない。ピッコロ演劇学校は本科1年、研究科1年、計2年で修了する。研究科には3年まで在籍が認められるとのことで、私は2年在籍したが、それでもいつかは卒業しなければならない。卒業後も芝居を続けるにはどうすればいいかと考えた結果、自分で劇団を立ち上げるしかないと思ったのである。

ちなみにチーム銀河という名前は、このピッコロ演劇学校本科の中間発表会に由来している。このとき本科では「閉ざされた場所」を共通のテーマとしてオムニバスの芝居を上演することとなり、私は「銀河鉄道じゃない夜」という台本を書いた。人身事故で停車した電車の中に閉じ込められた乗客たちが身の上話を始め、そして……という30分弱の短い芝居であるが、私としては台本を書くのは初めてのことであった。その稽古の際、本科主任講師の本田千恵子氏が我々のグループをチーム銀河と呼んでいた。それをそのままユニット名にしたわけである。

チーム銀河は一年に一本のペースでこれまでに6本の芝居——『マイ・スイート・スイート・ホーム』、『チェーホフなんか知らない、または余はいかにしてロシアの文豪となりしか』、『レミゼって呼ばないで、または本を飛び出したジャン・バルジャンの華麗な冒険』、『オズの部屋探し、またはオーバー・ザ・レインボウ不動産のいちばん長い日』、『リハーサル』、『メフィスト』——を上演しており、3本目の『レミゼって呼ばないで』以降はずっと M. T. C. Project (旧名、モンゴルズシアターカンパニー) の増田雄が演出を担当している。

増田は今では私にとってベストパートナーともいうべき存在であるが、2018年1月に突然、一つの芝居を毎月一回一年間ロングラン公演しないかと言ってきた。そういう芝居をいくつも並行して上演し、最終的にはひと月に30本芝居を上演したいと言うのである。本当にそんなにうまくいくのかと思わないではなかったが、私は賛成し、手始めとして前年の10月に上演した『オズの部

屋探し』を改訂し、2018年5月から2019年4月まで上演することにした。

会場は大阪・緑橋にある杉浦実業株式会社二階会議室であるが、それには訳がある。杉浦実業株式会社会長の杉浦勝昭氏はフランス生活が長く、奥様もフランス人である。そのためフランス文化に対する造詣が深く、私は人を介して杉浦氏と知り合い、何度か杉浦氏主催のフランス関連の会に出席したことがあった。杉浦氏は『オズの部屋探し』の公演を見て大いに気に入り、公演終了後に出張公演という形でこの芝居を杉浦実業の会議室に呼び、一夜限りの上演の機会を与えてくださった。

杉浦実業は不動産会社である。だからこそ不動産屋を主人公とする『オズの部屋探し』を気に入ってもらえたのだらうと思うが、我々としては不動産会社の会議室で不動産屋の芝居を上演するのは大変面白いと考え、毎月一回一年間ロングランについて会場をお借りできないかと申し出て快諾を得たのである。

この公演とは無関係に、私は本学出身の能楽師、^{あきたか}上田顕宗氏と交流があり、上田氏の提案に応じて2019年2月にフランス人のための能のセミナーを夙川の能楽堂、瓦照苑で開催することとなった。ちょうどそれは杉浦実業での『オズの部屋探し』の上演日の前日であった。私は二つのイベントのコラボのために『オズの部屋探し』にフランス語字幕をつけることを考え、一年間ロングランの最後の三回、2月～4月はフランス語字幕付きで上演し、フランス人のお客さまに来ていただくことができた。

せっかくフランス語字幕をつけたのなら、パリで上演したいと思うのが人情である。増田と私はそういう話をしていたが、所詮は夢物語、本当に実現するとは思っていなかった。ところが、ロングラン終了後、杉浦氏におそるおそるその話をしたところ、杉浦氏は俄然乗り気になり、「よしやろう」と言ってくれた。

とはいえ、大きな問題が二つあった。一つは資金面をどうするかである。『オズの部屋探し』は二人芝居である。演出の増田が音響、照明、字幕の一切を引き受けるので、三人いれば上演できるのだが、それでも三人分の航空運賃、宿泊費は捻出しなければならない。幸いにして杉浦氏の資金援助とクラウ

ド・ファンディングと有志の寄付に加え、杉浦実業の創立記念パーティーや忘年会で『オズの部屋探し』のスピンオフ的な寸劇を上演し募金を募ることで、必要な資金を集めることができた。杉浦会長をはじめとして、パリ公演の資金協力をしてくださったみなさまには心から感謝する次第である。

もう一つの問題は会場の選択である。パリには数多くの小劇場があるが、どこにどのような劇場があるか、その劇場の設備やキャパシティや借り賃がどうなっているかは我々にはなかなかわからないからだ。しかし、この問題も杉浦氏が実際にパリに行った際に Workshop ISSE のオーナーである中沢須美子氏に話を付けてくれたことにより解決した。Workshop ISSE はパリ 2 区、オペラ座の近くで日本酒を販売している店だが、レストランも経営しており、そのレストランを 2020 年 2 月 19 日（水曜）から 22 日（土曜）まで四日間、公演にお借りすることになったのである。

残る問題は情宣である。これには全くアテがなく、正直困り果てた。幸いにして複数の人を介してルノー・ブータンというフランスの演劇人が訪日中で、近いうちに関西にも来ると聞き、早速連絡をとり直接会って協力を取り付けることができたので、チラシに関してはパリのブータン氏にチラシの画像を送り、ネットで印刷を発注してもらい、Workshop ISSE に届くようにして、中沢氏に近くの店舗にチラシを置いてもらうよう依頼したが、とてもそれだけでは集客はおぼつかない。パリで二週に一度発行されている日本語のタウン誌 OVNI や、OVNI の姉妹誌でフランス語で日本関連の情報を発信している Zoom Japan に連絡をとり、公演の記事や広告を掲載してもらったほか、フランスの日本語教師の団体や日本語を教えている大学・高校・語学学校、さらには関西学院大学同窓会や京都大学同窓会のフランス支部をネットでリストアップし、手当たり次第にメールを送ったが、実際に返信が返ってきたのはごくわずかだった。もちろん、私のパリ在住の友人、知人にも連絡を取ったが、その数は決して多くはなく、一体どれだけのお客さまが来てくださるかは、当日になるまで全くわからない状態であった。

2020 年 2 月 17 日、増田と私、ピッコロ演劇学校本科同期で共演者の大盛り

桂子の三人はパリに向けて出発した。当時はまだフランスはもちろん日本でも新型コロナウイルスは流行していなかったが、フランス人には日本人も中国人も区別がつかないため、いわれのない差別を受けるかもしれないと思っていたが、全くそのようなことはなく、メトロの階段でスーツケースを運ぶのを手伝ってくれたり、スマホと首っ引きで道を教えてくれたり、雨が降ってくるとさりげなく傘をさしかけてくれたり、「フランス人ってこんなに親切だったっけ」と思うほど親切にてもらえたのは、望外の喜びであった。

宿泊先はパリ郊外ラ・デファンスのキッチン付きのホテルを借りた。フランスは外食が高いので、お金を節約するためスーパーで食材を買い込み、自分たちで料理をするようにしたのである。大盛りには少し気の毒だったが、三人同じ部屋で、増田と私はロフトに置かれたダブルベッドで、大盛りは階下のソファベッドで寝ることにした。

特に印象的だったのはラ・デファンスの駅を降り地上に出たとき、高層ビルの間に虹が出ていたことである。上にも書いたように『オズの部屋探し』には「オーバー・ザ・レインボウ不動産のいちばん長い日」という副題がある。不動産屋の男は映画『オズの魔法使い』の大ファンで、『オズの魔法使い』にちなんで自分の店に「オーバー・ザ・レインボウ不動産」という名前をつけたという設定である。その芝居の公演直前に虹が出たことは、我々にとっては吉兆に思えた。もう一つ驚いたのは、翌日メトロに乗っているとき、アコーディオン奏者が「虹の彼方に」を演奏したことだ。これもまた我々には吉兆に思えた。

初日の集客数は正直それほど多くはなかったが、観客が一人も来ないことさえ予期していた我々にとっては十分な数であった。しかし、驚くべきことに日を追うごとに客数は増えていき、四日目の千秋楽は満席で補助席を出さねばならない状態になった。お客さまの大半はフランス人で、日本人のお客さまは1割か2割というところだった。

『オズの部屋探し』は少し変わった女性客が不動産屋にやってくる場所から始まる。彼女は間取りも広さも家賃もどうでもいい、とにかく部屋を探していると言う。困り果てた不動産屋は女を4つの部屋に案内する。最初は学生が

住むような安下宿、次はワンルームマンション、三つ目は2DKのマンション、最後は4LDKの豪華なマンションである。女はそれぞれの部屋で「この部屋には以前どんな住人が住んでいたのかしら」と言っていて、嫌がる不動産屋を巻き込んで即興劇を始める。そうすることによって、あるカップルの恋愛、結婚、離婚、再会のドラマが紡がれるというのが、この芝居のコンセプトである。

果たしてそれがフランス人の観客にどう映るかは予想できなかったが、終演後の反応は総じて好評で、「笑いの奥に誰しも覚えのある人間のドラマが隠れている。それに感動した」、「来てよかった」と言ってくださったお客さまが大勢いたこと、全く知らないフランス人のお客さまが観劇の翌日、演劇ユニット・チーム銀河あてにメールをくださり、お褒めの言葉を書いてくださったことは、私にとってなにもにもかえがたい大きな喜びであった。

特に印象的だったのが、千秋楽のカーテンコールである。私は Workshop ISSE よりもはるかに大きな劇場で、はるかに大勢のお客さまを相手に芝居をしたこともあるが、あれほど大きな拍手を受けたことはなく、こちらが話し始めようとしてもなお拍手が鳴り止まないというのは初めての体験だった。役者冥利につきるとはまさにこのことだ。この公演は、増田にとっても大盛りにとっても、もちろん私にとっても、生涯忘れることのできない貴重な体験となった。

『オズの部屋探し』パリ公演は、杉浦勝昭氏をはじめ、多くの方々のご協力、ご尽力の賜物である。その方々にこの場を借りて感謝の意を表明したい。

本当にどうもありがとうございました。

追記

『オズの部屋探し』パリ公演の動画は Youtube の演劇ユニット・チーム銀河チャンネルで5回に分けて配信しています。Youtube で「演劇ユニット」、「チーム銀河」で検索すればすぐに出てくると思いますので、ご覧いただければ光

栄です。このチャンネルではアルペール・カミュの『ペスト』を朗読劇をまじえながら紹介・解説する動画（全7回）やカミュの生涯、思想を紹介する動画、増田と大盛りと私がパリ公演について語る動画なども配信しております。

予定していました『メフィスト』の毎月一回一年間ロングランは新型コロナウイルスの感染拡大のため2020年3月から中断しており、現在もなお再開のめどが立っていません。キャスト、スタッフ一同は状況が整いさえすれば再開する所存でいます。そのときには演劇ユニット・チーム銀河公式サイトやFacebookで告知をいたしますので、どうぞよろしく願いいたします。

この原稿を書き終えた後、杉浦様のご家族から杉浦勝昭様が9月20日に亡くなられたとの知らせを受けました。この場を借りて杉浦勝昭様に感謝と哀悼の意を捧げたいと思います。